

『今昔物語集』における「ムトス」「ムト為」「ムガ為」

——「為」との関係から——

田 中 雅 和

目次

はじめに

一、「ム為」表記について

二、「ムガ為」と「ムト為」

三、「ムト為」と「ムトス」

四、「ムガ為」「ムト為」「ムトス」

五、「為」「欲」「将」と漢文訓読語

むすびに

はじめに

従来、ムトスが問題とされる場合、ムズと対比され、或はムとの相違も含めながら、その用法上の差異が指摘されてきた。その特徴的なものを簡潔に例示すれば、次のようである。ムズが口頭語（口語調）であるのに対して、ムトスが文章語（文語調）である。地の文においては、ムズが情意的であり自然的状態的であるのに対して、ムトスが判断的であり意志的動作的である。（仏教）説話文学では、和文調のものはムズ、漢文訓読調のものはムトスに偏る。また、ムトスは

主として漢文訓読の用語で、院政鎌倉時代には強調的な語感をもって用いられる、などの指摘⁽¹⁾である。更に、近時はベシとの関係にも注目され、両者の意味・用法についても新たな見解が示されてきている。即ち、平安和文におけるムズの元来の意味は「意志」であり、推量の場合は「確信を持った推量」を表すのに対し、ムトスは「登場人物の意志に基づく動作」を活写する性格の物語用語である。また、後にはムズが「事態の推移」に近い意味を持ち始め、「切迫した事態」の推量をも表し、ベシの持つ表現と類似性を持つようになる、などの指摘⁽²⁾である。

本稿ではこれらの成果を踏まえながら、今までとは異なった視点での検討・考察を加え、改めて『今昔物語集』(以下「今昔」と略記する)のムトスを中心に考えてみようと思う。それによって、中古・中世におけるムズ・ムトス或は推量表現を考える為の足掛かりも得られるのではないかと考える。ムズ・ムトス(就中「今昔」のそれ)については、既に詳細な研究成果が報告されているが、視点を交えることで新たに見えてくる部分もあろうし、また、問題にされてこなかった重要な点もあるように思うので、敢えて卑見を述べ大方の御批正を仰ぎたい。

まず本稿で取り扱う問題の所在を中心に、その周辺にある問題も併せて整理し、本稿の目的の位置を確認しておきたい。第一に、ムトスが漢文訓読用語であるということとの関係からである。ムトスは、漢文訓読によって初めて行われた語法ではなく、おそらく古来の語法であったと思われるが、和文よりも訓読系の文体中で積極的に用いられたことなどからも、漢文訓読とより密接な関係を持つものであったことは認められて良い。訓読に際しムやムトスの訓(補読を含む)の対象となった漢字は、点本資料では「欲・將・為・擬・將欲・將擬・且・垂」⁽³⁾などがあげられる。漢字との関係で考えるならば、和化漢文における漢字との関係も考えられなければならないが、和化漢文でもムトスと密接な関係を持つのは「欲・將・為」の三字程度である。そこで、この三字とそれぞれの訓読との関係を視野にいれて、ムトスの性格を考察しようと思う。そのことの意義を漢字の訓や意味・用法を概観することで示すと、次の通りである。まず、ム・ムトスが「意志」とその他推量などの意味を有するのに依りて、「欲・將」も同時に両意味分野を担っていたが、本義的

には、「欲」は願望の動詞であり、「將」は事柄がこれから実現することを表す將然の義を持つ状態副詞や陳述副詞としての用法であったと考えられる。その本義的な字義の差が根本的な部分ではなおある程度意識されて、和化漢文においては「欲」は「意志」に「將」は「意志以外」に偏った使用傾向にあることは以前指摘した⁽⁴⁾。更に、『觀智院本類聚名義抄』にも「欲・將」にはムトスの訓が掲載されるが、「為」字に助動詞ムとの関連を窺わせる訓はなく、前者とはムトスとの関連の仕方や程度に差異があつたものと思われる。このことから推測するに、「欲・將」は国語助動詞ムとの結び付きを強く持ち（スは実質的な意味を持たない形式用言）、「為」は動詞スとの結び付きを強く持って、ムトスの訓が与えられたのではないかと考えられる。従つて、少なくとも和漢混淆文に於いては、外形上は同じであつても、殊に漢字が背景にある場合は、ムトスの総てを同列に扱うべきではないと思うのである。また、「將」字には再詭字が成立した平安後期以後「マサニ〜ムトス」の訓読が定着し、その事は和漢混淆文の語法にも何らかの影響を与えたであろうから、副詞との呼応についても考える必要があるように思われる。

第二に、前述の問題とも関わるが、和漢混淆文―就中本稿で対象とする『今昔』のような漢字仮名交り文―に於いて表記上「ムトス」と「ムト為」との相違のあるものを、全く同一に捉えてよいかという点である。助動詞が仮名表記されるという傾向を基本的な表記姿勢として認めて良ければ、漢字「為」を交えた表記の意味は考えられるべきである。ムトスが、ムやムズなどと全く同様に、一語相当の資格で助動詞として機能していたのであれば、同一の語の一部分が異なる表記であることは少々異様に感ぜられる。更に、ムトスとムト為との間に意味・用法上の相違が全くないのであれば、表記上の労力・負担の大きい多面数の漢字「為」が殊更に選ばれることは、一般的な書記の経済性に反するよう⁽⁵⁾に思われる。以上の事を考え合わせると、「ムトス」と「ムト為」との表記の違いは、語に対する有意的な區別意識の反映、或は結果的に表記の違いとして現れる必然的な事情などを背景にしていると見た方がよいように思うのである。

最後に、以上の問題を考察するのに、『今昔』を検討対象とすることの意義と理由について触れておく。まず、助動詞

ムの意味・用法が縮小する傾向にあり、同時にムズが勢力を伸張する時期にあつた時代の言語を反映する資料であることである。次に、文体上の位相差や文の種類（会話文・思惟文・地の文）による異同を一文獻の中で確認し得ること。また、表記形態が漢字仮名交りであり、且つ宣命書きの明確な部分を中心に、自立語は漢字・付属語は仮名という区別を基本的な姿勢として認め得る資料であることなどが挙げられる。なお、本稿の調査には「東京大学国語研究室資料叢書」の『今昔物語集』（紅梅文庫旧蔵本）を底本として用い、未刊行と欠損の部分については「日本古典文学大系」でこれを補った。資料の性格の統一性と、加筆等をはじめとする表記の実態を把握することなどが主な理由である。また、異本の校合には「日本古典文学大系」と「日本古典文学全集」を主に用いた。調査の結果について詳細な見直し・確認を行っていないので、用例数の厳密さには不安を覚えるが、数の増減があつても論旨に齟齬をきたす程ではないと考える。

一、「ム為」表記について

『今昔』のムズ・ムトスを検索していくと、それに関わつて次のような特異な表記による語が僅かながら見出せる。即ち、動詞に下接した「ム為」の表記例である。

- ① 王童子ニ宣ハク「此ノ仏ヲ安置シ奉ラム為ニ速ニ伽藍ヲ可建シ」ト（二一 15）
- ② 我が妻ニテ有シ人ノ氣ハヒニ聞キ成シツ我ヲ尋ネン為ニ此ク行フ也ケリト思ヒ哀レニ悲シキ事无限（二九 1）
- ③ 而ル間天皇諸司ニ勅テ獵ニ遊ハム為ニ伊勢ノ国ニ行幸有ラムトシテ（二〇 41）
- ④ 問テ云ク「此ハ誰人ノ来テ遊ヒ給フソ」ト答テ云ク「月ヲ見ム為ニ来レル也亦汝ハ何ナル尼ソ」ト（二四 27）
- ⑤ 彼ノ市ニシテ買ハム為ニ 聞テ「此レ盗メル絹也ケリ」ト云（一七 48）
- ⑥ 僧ニ云ク「不心得ナ思不給ソ此ハ系業キ世界也思フ事モ无テ豊ニテ有セ奉ム為也」ト云程ニ（二六 8）
- ⑦ 講師「何計ノ寺ナレハ我レニ対テ論義ヲセム為ナラム」ト疑ヒ思テ見返タルニ（一一 2）

「ムガ為」の表現型		1～10	11～20	22～31	合計	総計
～ムガ為ニ～ス	地の文	85	102	28	215	387
	思惟文	6	10	0	16	
	会話文	70	78	8	156	
～スル(ハ)～ムガ為也	地の文	3	4	2	9	18
	思惟文	0	0	0	0	
	会話文	5	3	1	9	

⑧「大臣此レヲ見テ何ナル事ヲ宣ハムスラム我カ身ハ何カハ成ラム為ラム」ト〔七 39〕

⑨善神：法嚴聖ニ語テ云ク「昨日ノ聖人ノ言ニ依テ早く食ヲ持来ラム為ル間ニ法花守護ノ聖衆：持者ヲ圍繞シテ四方ニ充滿セリ：」〔一三 39〕

⑩忍ヒテモ不云リシ事ナレハ自然ラ伝ヘ聞テケルニ今過ム為ル程ニ此ノ男云ク〔二五 10〕

⑪「：午時許ニソ戦ハントスル吉ク々物ナド食テ此嚴ノ上ニ立ン此ヨリ上ラン為ル」ト〔二六 9〕

『今昔』における「為」字の使用状況と意味・用法から考えて、右例の「為」はいずれも「タメ」か「ス(ル)」かに訓ぜられるべきものである。従つて、「ム為」はムタメかムズ(ル)の漢字表記と考えられる。或はまた、意味・用法上、「ト」の文字はないが、ムトスの漢字表記である可能性も捨てきれず、少なくともムトスとの関係が極めて密接な表記形態であると言える。そこで、「ム為」の意味・用法とその訓みの可能性について、以下考察を加える。

まず、①～④は「甲動詞+ム為ニ」乙動詞」の構文をとっている。甲動詞と乙動詞との動作主体は同一人物であり、「ム為」を含む甲部分は乙動詞の動作の目的としての「意志」を示している。例えば④の場合、「月ヲ見ム為ニ」(甲部分)は「来レル」(乙動詞の動作)目的として「月を見よう」という「意志」を示している。この構文は『今昔』のムガ為に特徴的に認められる表現型と同じである。ムガ為による表現

は、「甲動詞+ムガ為ニ〜乙動詞」(〜ムガ為ニ〜ス)か「乙動詞〜甲動詞+ムガ為也」(〜スル(ハ)〜ムガ為也)かの型で出現し、「甲動詞+ム」部分が乙動詞の動作の目的としての〈意志〉を示す用法である。しかも、前頁の表に看取できるように、「甲動詞+ムガ為ニ〜乙動詞」型が95%を占める。しかし、ムズには「動詞+ムズルニ〜動詞」の表現型がなく、意味・用法上も構文上も前述と同じものは認められない。これらのことから考えると、①〜④の「ム為」は、ムガ為と同じ意味・用法のムタメと見るべきであり、ムズの漢字表記とは考え難い。そのことは次例のような諸本との異同関係からも確認できる。

⑫ 答テ云ク「我レ昔シ兄ト共商ナヒセム為ニ所々ニ行テ銀四十斤ヲ商ヒ得タリキ(略)」(一九三)

* 商ナヒセムガ為ニ(古本系)・商ヒセムト為ニ(流布本系)(大系注)

この例は、「〜ムタメニ」「〜ムガタメニ」「〜ムトスルニ」のいずれでも文脈に差異はなく、三者が意味・用法上相通ずるものであり、且つ表記上も極めて密接な関係にあることを諸本間の異同によって確認し得る典例である。

その他の例も同様に「ム為」がムズであることを積極的に支持するものではなく、寧ろこれもムタメかムトスが擬せられるべきものであろう。但し、⑨⑩⑪は仮名「ル」を伴った「ム為ル」表記なので、ムタメではあり得ない。しかし、この場合でもムズよりもムトスとの関係の方が重視されるべきもののように思われる。ムズとも見做し得る六例⑥⑦⑧は、仮名表記のムズ約二〇〇例に対して余りにも特殊な少数例であり、書記の経済性を考えても同一語の異表記と見難く、少なくともムズを背景とした漢字「為」使用とは考え難い。しかも、意味・用法上もムズよりムトスに近いものである。つまり、ムト為が意図されながら、「ト」の脱落などにより、結果的に「ム為」になったものと考えられる。これは、ムズとムトスとが全く同じ意味・用法であると思えば問題にならないが、両者間に相違を認める立場からは、〈意志に基づく動作〉を客観的に描写するのに用いるというムトスの原義が活きた用法で漢字「為」が用いられたものと見ることができるのである。

以上のように、「ム為」がムズであると見るべき積極的な要素はなく、寧ろムガ為やムト為と通ずるものであることが確認される。或はまた、漢字「為」の使用は無秩序に現れる訳ではなく、それに至る必然的背景なり意図的な區別意識なりが存在すると考えられるべきものであることが明らかになる。「ム為」表記を通して、ムガ為とムト為とが非常に密接な関係にあることと、漢字「為」が使用されたことの意味との方が留意されるべき点として確認されたと言つて良い。そこで、次にこのムガ為とムト為との関係についてもう少し詳しく考察を加えたいと思う。

二、「ムガ為」と「ムト為」

ムガ為とムト為とがいかに緊密な関係にあるかは、先の⑩で見たように、諸本との異同関係からも窺うことができる。

○「：若シ教ヘント為ニ来ルカ然ラハ来テ可教シ我心ニ叶ハ、用ケン不叶スハ肝膾ニ作リテントス」〔二〇 15〕

*教ヘンカ為ニ〔鈴鹿本〕

○山城ノ国相楽ノ郡ニ一ノ人有ケリ願ヲ発父母ノ恩ヲ報セント為ニ法華経ヲ写シ奉レリ〔二二 26〕

*報セムカ為ニ〔鈴鹿本〕・底本では「ト」の傍らに「カカ」と加筆

○此ノ夢ノ聞キ継テ世ノ人京ヨリモ田舎ヨリモ此ノ人ニ結縁セムト為メニ尋ネテ来ル人ノ員多シ〔二七 39〕

*結縁セムカ為メニ〔鈴鹿本〕

○「：国王亦衣服ヲ脱テ送り遣ス其ノ夫亦法ヲ聞ムト為スニ仏ノ御許ニ詣タリ〔略〕」〔二一 13〕

*聞ムカ為ニ〔鈴鹿本〕・底本では「ト」に「カ」を重ね書き「ス」の傍らに「メカ」と加筆

右例はいずれも鈴鹿本でムガ為となる例であるが、ムト為でも意味上の差異はなく、ムガ為とムト為との語の違いが文脈に影響を与えない。しかし、異本との異同は確認できないが、語法上破格的表現になる次のような一例もある。

○良藤「我カ有ル所へ去来」ト云フニ女見苦シキ事ト云テ引キ離レムカ為レハ良藤「然ハ何コニ有ルソ我レ具シテ行

カン」ト云へハ女只「彼コニ」トテ（一六 17）

これらは無意味な単なる誤写というレベルで捉え片付けられるべきものではない。或は推敲過程での混淆とも解釈できるが、だとすれば斯かる推敲の意味が考えられなければならない。そこには、例えば次のような経緯が推測できる。

訓読という解釈・理解行為の側面から考えると、漢字「為」がその意味として、動作の目的を表すと解釈されればタメに、動作を具体的・抽象的に表すと解釈されれば動詞スに訓読すべきものと、まず逐語訳の段階では本義的差異が区別して理解される。それが文脈に応じて、〈動作の目的としての意志〉（目的が動作性動詞で示される時その動作はそもそも動作主体の〈意志〉を伴う）や〈意志に基づく動作〉を表すと解釈される段階に至れば、そのニュアンスを日本語としてより正確に表現する為に国語助動詞ムが添えられて、それぞれム（ガ）タメやムトスと訓まれることになる。一方、それはそれぞれ和文の「む（が）ため」や「むとす」と語形も語法も基本的部分では同じである。そこで、和漢混淆文（表現行為の場）でも、「ししようとする目的でしする」という意味を表す場合には、ム（ガ）タメニ・ムトスルニ（或はムトシテの可能性も）のいずれでも表現可能で、意味・用法に大差がなくなつていつたと思われる。それは、目的となる行為が「意志に基づく動作」として表現されることに依る。そうなると、訓読（理解行為）に際して、斯かる意味に用いられる漢字「為」は、ム（ガ）タメ・ムトスのどちらでも訓読可能であり、和漢混淆文での表現行為においても両者に依る表現が可能であつたと考えられる。しかも、文中にあつて（文が続く場合）は、両者共に助詞「ニ」を取る形（タメニ・スルニ）であつたことの影響も大きい。こういう事情を背景として、推敲があり得、混淆も生じ得たのではあるまいか。まして、漢文の「為」字が返読字であることとの関係も、これらの背景として注視すべきことのように思う。漢文における意味・用法や、出典文献との関係にも考察を及ぼす必要があるが、未だ述べる用意がない。即ち、ここに『今昔』における現象の意味、ムガ為とムト為との関係の緊密さを認め得ると考えるのである。

更に、諸本との異同からばかりでなく、次の如き例からもムガ為とムト為との緊密な関係を窺うことができる。

④食ヲ儲テ此等ニ備ヘムト為ルニ家ノ入市ニ行テ一ノ羊ヲ買ヒ取テ持来レリ〔九 18〕

④大ナル寺ヲ其ノ所ニ造ル弘濟相ヒ共ニ此ヲ當テ仏ノ像ヲ造ラムト為ルニ金ヲ買ムカ為ニ弘濟ニ多ノ財ヲ持セテ京ニ上テ〔一九 30〕

④国内ノ人此ノ事ヲ聞テ亦哭キ悲テ王ノ恩ヲ報セムト為ニ多ノ財ヲ出集テ広无遮ノ大会ヲ儲ク〔一 23〕

④夢ニ仏来リ給テ釈妙ニ告テ宣ハク「我レハ此レ汝ヲ引撰セムト為ニ常ニ来テ守護ス」ト宣フト見ケリ〔一五 40〕

④朗等尚奇異ト思テ此ノ事ヲ疾ク主ニ聞セムト為ニ走ルカ如クニシテ返リ下ヌ〔一六 5〕

④此テ居タル家ノ後ニ堂ヲ起テ、此ノ娘助ケ給ハムト為ニ觀音ヲ安置シ奉ル〔一六 7〕

④「我レヲハ殺サムト為ニ此ノ嶋ニ放ツル也ケリ」ト思テ只独リ不知ス嶋ニ有リ〔一六 25〕

右例は「くしようとする目的でくする」の意で、「甲動詞＋ムト為ニく乙動詞」型の構文で用いられたムト為表記の例である。ムガ為が用いられた場合と全く同意に解釈でき、用法上も違いがない。右以外にも一五例の類似例が確認できるが、一般に漢文訓読の影響・色彩が濃いと言われる部分に多く見出せる。その所在を、巻数と説話番号で、次に示す。

〔二 13 16 31〕〔三 23〕〔六 6〕〔七 18〕〔九 10 18〕〔一〇 15〕〔一一 26 33〕〔一二 22〕〔一五 2〕〔一九 3〕〔二七 24〕これらは、④の如く「ル」の送られる例が二二例中の一四例を占める事から、「ムトスルニ」と訓まれたと思われるが、仮名表記のムトス（ムトスルニ）には斯かる用法の類例が全く無い。⁹⁾「ムト為」が漢字「為」を有すること（為の字義と、和語との結び付きや訓読の上でタメでも動詞スでもあったこと）による特徴的な用法と捉えられる。即ち、この点において、「ムト為」と「ムトス」との表記の相違は、意味・用法の相違を反映していると見ることができ、漢字「為」が用いられることに必然的背景や有意的区別のあったことが認められるのである。

ムト為がムガ為と通ずるのであれば、ムガ為のもう一つの表現型「くスル（ハ）くムガ為也」と同じ用法でも現れるこ

とが期待される。事実、次の如き例が指摘できるが、今回の調査では一例しか得られていない。⁽¹⁰⁾しかし、ムガ為においても、この型は全体の4%にしか過ぎないこと先に示したとおりである。両者の関係の緊密さを示す一つの傍証にはなり得る(寧ろ『今昔』の文体上の特徴を示す一事象と捉えるべきであろうか)。⁽¹¹⁾

○如此ク構フル様ハ汝ハ盗ヤ為タリシト問ハムト為ル也(五 3)

「乙動詞く甲動詞＋ムト為」の表現型をとつて、「くするのはくしようとする目的からである」の意を表しており、ムガ為と置き換えても意味・用法は全く変わらない。他方、外形上は同じ表現型をとり、内容上も甲部分が乙動詞の行為の目的(或は理由)を示すが、ムガ為に置き換えると語法上は文を成さなくなるものがある。それは乙部分が主格・甲部分が述格となる「く乙スル(ハ)く甲ムガ為也・ムト為也」の表現に対して、次の例のように乙と甲とが主述の関係にならないことに依る。

①魚鳥ヲ儲ケムカ為ニ野山ニ出テ、鳥ヲ伺ヒ江海ニ臨テ魚ヲ捕ムト為ルニ一ノ大ナル池有リ(一六 35)

②女子大路ニ有ル井ニ行テ水ヲ汲ムト為ルニ此ノ宿タル但馬国ノ者モ足ヲ洗ハンカ為ニ其ノ井ニ行ヌ(二六 1)

しかし、②の例に象徴的に認められるように、この場合も内容的にはムト為とムガ為とが文中において担う意味は全く同じであり、両者間の相違は用法上の(主に語序や文の断続との関係からくる)問題である点に特徴がある。即ち、「女子」の「井ニ行」(乙動詞部分)行為の目的が「水ヲ汲ムト為」(甲動詞部分)で示され、一方「但馬国ノ者」の「井ニ行」(乙動詞部分)行為の目的は「足ヲ洗ハンカ為」(甲動詞部分)で示されるのであって、ムト為とムガ為との相違は語序(前者が「乙動詞部分く甲動詞部分」後者が「甲動詞部分く乙動詞部分」と文の断続関係によつてもたらされたものであろう。なお、文の断続関係を考慮するのは、二文で表現すれば「女子大路ニ有ル井ニ行ハ水ヲ汲ムガ為(ムト為)也。其ノ時ニ此ノ宿タル…」でもあり得たものが、一文で表現することによつて「く乙シテく甲ムト為ニく」になつたと考えられるからであるが、推論と解釈の重ね過ぎであろうか。⁽¹²⁾

いずれにしても、ここまで確認できたのは、ムガ為とムト為との関係の緊密さと、それを通して、今まで指摘されなかつたムト為に極めて特徴的な意味・用法があることである。この視点は、和漢混淆文におけるムトスの性質を把握し、表記の異なる「ムト為」と「ムトス」との性質の違いを明確にするのにも有効であると考えられる。そこで、次にこの視点で「ムト為」と「ムトス」とについて考察を加えてみたい。

三、「ムト為」と「ムトス」

ムガ為に相通ずる「甲動詞＋ムト為ニク乙動詞」型による表現については、「ムト為」にはあるが、「ムトス」には皆無であることも一つの特徴として確認できた。ここでは、行為の目的や理由を表すのに用いられた、ムガ為にもある、もう一つの表現型「乙動詞く甲動詞＋ムト為・ムトス」を通して、ムト為とムトスの性質について考察する。

検討対象とする用例は、外形上一文中に複数の動詞がある点と同じでも、「此レヲ見テ喜テ噉ムト為テ□抑誰人ソト問へハ上ノ如ク答フ」(四 20)の如き動作・状態の並列例、「くして、次にくしようとする」の意になる例などは除き、乙に対して甲部分が目的や理由を表している」と解釈できる意味内容を持つものを見る。具体的には先に引用した(a)(b)の如き例である。次にその用例の所在と若干の具体例を示す。中には「くして、次にくしようとする」という意の動作の時間的流れや手順などについて表現したものと峻別し難い例もある。しかし、甲動詞にムト為・ムトスを附すことの意味が、単なる意志に基づく動作の描写に与るのでなく、乙の動作に対して目的や理由となる意志を表現することに關わりと解釈し得るか否かを基準とすることで、それとの区別はある程度可能である。

◇「乙動詞く甲動詞＋ムト為」

○(一) 3 7 10 27 35 (二) 31 39 (三) 18 (四) 14 17 21 21 31 (五) 1 3 7 8 9 14 14 31 (六) 2 11 26 (七) 44 (九) 4
5 8 (一〇) 20 23 28 35

○〔一一 6 6〕〔一二 7 16 18 25 25 37〕〔一三 16〕〔一四 16〕〔一五 51〕〔一六 2 8 13 21 35 35 36〕〔一七 35 43〕

〔一九 7 36〕〔二〇 9 22 33 35〕

○〔二三 23〕〔二四 14〕〔二五 13〕〔二六 1 5 8 12〕〔二七 14 38 39 40〕〔二八 30 42〕〔二九 1 26 31 35 35〕〔三一 14 28〕

○〔三三 23〕〔三四 14〕〔三五 13〕〔三六 1 5 8 12〕〔三七 14 38 39 40〕〔三八 30 42〕〔二九 1 26 31 35 35〕〔三一 14 28〕

○〔三三 23〕〔三四 14〕〔三五 13〕〔三六 1 5 8 12〕〔三七 14 38 39 40〕〔三八 30 42〕〔二九 1 26 31 35 35〕〔三一 14 28〕

○〔三三 23〕〔三四 14〕〔三五 13〕〔三六 1 5 8 12〕〔三七 14 38 39 40〕〔三八 30 42〕〔二九 1 26 31 35 35〕〔三一 14 28〕

○〔三三 23〕〔三四 14〕〔三五 13〕〔三六 1 5 8 12〕〔三七 14 38 39 40〕〔三八 30 42〕〔二九 1 26 31 35 35〕〔三一 14 28〕

○〔三三 23〕〔三四 14〕〔三五 13〕〔三六 1 5 8 12〕〔三七 14 38 39 40〕〔三八 30 42〕〔二九 1 26 31 35 35〕〔三一 14 28〕

ケハ〔二七 39〕

◇「乙動詞」甲動詞「ムトス」

○〔一 9 10 11 37〕〔二 25 30 31〕〔三 10 15 27〕〔四 9 26〕〔六 6〕〔七 1 13 16 18〕〔九 18 35 36〕〔一〇 1 1 18〕

○〔二一 21 23〕〔二九 2 40〕〔二〇 17〕

○〔二四 9〕〔二六 13〕〔二八 33 42〕〔二九 28 29 32〕

『今昔物語集』における「ムトス」「ムト為」「ムガ為」

⑧ 龜ノ頸ハ四五寸ト指出ツル物ヲ指寄セテ吸ハムトセムニハ當ニ不被昨又様ハ有ナムヤ (二八 33)

まず、全体の用例の所在から看取できることは、漢文の出典を持つなどして漢文訓読の影響・色彩が強いと指摘される巻に偏在する傾向にあることである。特にムトス表記においては著しい。更に、ムト為表記(七八例)の方が、ムトス表記(三五例)より、圧倒的に多いことも特徴として指摘できる。本朝部においては、ムト為四六例に対してムトス一二例であり、その使用割合の差は広がる。ここでも、斯かる用法が、漢字「為」の意味・用法やその訓読との関係(或は出典となった漢文もか)を背景としたものであることが窺える。

次に、ムト為とムトスとの間に認められる特徴的な相違についてである。ムト為は、^(a) ⁽ⁱ⁾に見るように「ムト為ルニ」の形で文中に用いられる場合が殆どで、「ムト為ル程ニ」「ムト為ル間(ニ)」と合わせると全体の約九割を占める。その他^(g)の如き例も含めて、後件と接続する形で文中に用いられ、文末に用いられたものは僅か七例に過ぎない。⁽¹³⁾

一方ムトスの方は、^(h) ⁽ⁱ⁾のような終止形の文末用法だけで約八割に及ぶ。^(j) ^(k)のように文中に現れるものは卷一九以降に限られ(七例)、しかも卷一九以降で終止形文末となるのは(二〇 17)(二九 28)の二例だけである。即ち、ムト為は文中用法、ムトスは文末用法という特徴的な相違が確認できる。例えば^(h)の「ムトス。其ノ時ニ」はムト為表記の「ムト為ルニ」などと意味上全く同じであるにも拘らず、「ムト為。其ノ時ニ」が無く「ムトスルニ」も殆ど無い。このことから、文の断続関係(文中か文末か)によって、その表記が区別されていたか、結果的にそうなる必然的な事情があったと見得るように思われる。少なくとも斯かる用法におけるムト為とムトスは、性質の総てを同じくするものではないと思われるのである。これも、調査の裏付けの無い憶測になるが、ムト為が文中で主に出現するのは、漢文の漢字「為」の訓読・解釈という行為が起因となっているのではなからうか。漢文を訓読する上で、文の断続は解釈によって決定されるが、漢文の「為」字は返読字であるから形式的表記(字面)上は文末に現れないことと関係があるのかもしれない。

四、「ムガ為」「ムト為」「ムトス」

ここまでの考察から、ムト為とムガ為とが極めて緊密な関係にあること、ムト為とムトスとは區別してその性質が論ぜられるべきであることが確認できたかと思う。そこで、改めてムト為とムトスの性質を考えるために、『今昔』全体の使用状況を、ムガ為と助動詞ム・ムズとも比較しながら見てみたい。所謂推量の助動詞が非常に多岐に互る意味・用法を持つ中で、〈意志〉の意味・用法に用いられるものとそれ以外のものとに分けて見ることは、殊に本稿で問題とする事を考える場合、有効である。これに従って、『今昔』の各巻における使用状況を、文の種類毎に整理したのが表Iである。¹⁴⁾表Iに看取できることは、ムガ為は総て意志表現に、¹⁵⁾ムト為も専ら意志表現に、ムズとムトスは寧ろ意志以外の表現に用いられる傾向にあると見得ることである。

まず、「為」字が「ため」と訓まれ用言を承けて動作の目的を示す用法を見ると、動詞連体形を直接承けた確例は僅か三例しかない。

○國王有リキ賊ヲ要スルカ為ニ无道ニ一ノ人ヲ蜜ニ語テ云ク〔二一三〕

○然レハ八幡ノ寺ノ仏法ヲ守リ給フカ為ニ不焼給ヌ也ケリト見エタリ〔二二二 20〕

○「…世ニ有ル人父母ニ孝養スルカ為ニ寺ヲ造リ塔ヲ起テ仏ヲ造リ経ヲ寫シ僧ヲ供養ス〔略〕〔二二〇 31〕

その他「知ル所ノ有ケルニ尋カ為ニ行ク道ニ唐門屋ノ家有リ」〔二七 33〕も一例ある。また、同じ意味・用法の仮名表記「タメ」は、今回の調査では、一例も見出し得なかつた。従って、斯かる意味・用法の「為」が動詞に下接する時は、四〇〇例余りがそうであるように、助動詞「ム」を介した漢字表記「ムガ為」の形になるのが一般的な姿であつたことが確認される。表Iに見るように、ムガ為の「ム」が総て〈意志〉の助動詞であるのは、「為」を伴うことによつて示される目的表現とはそもそもその主体の〈意志〉を伴うものであるから、当然と言える。一方、ムト為も〈意志〉に關

るのである。

更に表 I から看取できることは、〈意志〉表現に用いられたものとそれ以外のものとの割合と、文の種類による使用状況の割合とを、それぞれの語毎に比較することで明らかになるムト為の特徴である。まず、意志表現に用いられた割合を見ると、ム44%・ムト為90%・ムトス49%・ムズ20%であり、ムトスがムと極めて近い使用状況であるのに対して、ムト為は意志表現に用いられる点で突出している。次に、地の文に用いられた割合に注目すると、ム27%・ムト為69%・ムトス34%・ムズ21%であり、ムト為の突出が際だっている。つまり、ムト為は「地の文」で「意志表現」に用いられる点にその特徴を見出すことができる。地の文における意志表現は、表現主体自身の意志ではなく第三者の意志を述べるものであるから、前述の特徴を換言すると、ム・ムズ・ムトスとの比較からして、ムト為は第三者の〈意志〉を客観的に描写するため（ムトスの原義と指摘されるもの）の表記形態であると考えられる。

動作主体による分類（〈意志〉の用法以外）

		1～10	11～20	22～31	合計(百分率)
ムト為	有情物	10	32	6	48(90.1)
	無情物	1	3	1	5(0.9)
ムトス	有情物	87	56	35	178(83.6)
	無情物	11	17	7	35(16.4)
ムズ	有情物	13	33	83	129(83.2)
	無情物	2	6	18	26(16.8)

最後に、〈意志〉表現以外の用法のムト為とムトスとを見ることによつて明らかになる、ムト為の性質について見る。ムト為が〈意志〉の用法でないとした五三例の内、「命終ラムト為」（一八例）「死ナムト為」（二〇例）など人の死（〈意志〉に基づかない）の表現三二例を中心に四八例が、有情物（主に人間）の動作・状態に関わる表現に用いられている。そこで、意志表現以外のムト為・ムトス・ムズに
 応ずる主体が、有情物か無情物かによつて分類したものが上の表である。意志表現に用いられたものも併せて、ムトスやムズと比して、ムト為が有情物を主体

とした表現である点に特徴を見出せる。例えば、次の例は異表記が近接して現れ、主語の相違を反映した象徴的な例と見得る(但し、左例のムト為は〈意志〉の用法)。

○二日ノ夜ノ月ノ隠レナムトシケルニ御子酔テ入給ヒナムト為レハ業平中将此クナム(二四 36)

即ち、ムト為は、ムトス・ムズと異なり、人の行為に関わらない単なる推量や事態の推移に用いられることが極めて稀であったと言える。換言すれば、ムトスは「ス」が形骸化して実質的意味を既に持たずム(やムズ)と同じく一語相当の資格で機能していたのに対し、ムト為は「為」が未だ動詞スの意味を(実質概念は欠き乍も人の動作・状態を描写するという意味において)一部に残していた為の相違と見ることができそうである。

なお、その他にも表Iから指摘できるいくつかの問題(ムズやムトスの性質、それぞれの比較から捉えられる特徴等々)も考えられるところがあるが、それらについては本稿では触れず、次の機会に譲りたい。

五、「為」「欲」「将」と漢文訓読語

次に、「ムトス(為)」を漢字「為」「欲」「将」と漢文訓読語との関係からながめてみたい。その事の意義と理由ははじめに述べたとおりである。「為」との関係については、ここまで詳しく述べたように、「ムトス」(就中ムト為)が「為」字と緊密に結び付いた訓読語的要素の強い一面を持っていることを認め得た。『今昔』のような漢字交り文の場合は、当該漢字の使用状況との関係も重要な意味を有するものと見られる。

さて、漢文訓読における「欲」字については、「ムトス」と読むのは漢籍で、仏書ではムトオモフと読むことが多い。仏書の訓法ムトスは「院政期後半から鎌倉期の資料に見える」との指摘がある¹⁷⁾。また、本来「欲」の字義は意欲・願望であるとしてよい。そのような観点で見ると、『今昔』のムトス・ムト為が、〈意志〉表現に用いられたものも含めて、「欲」字を背景としたものであると積極的に認め得るものは殆ど無い。一方、ムトオモフなどとの関係で見ると、明ら

かな例は僅か一例「暫ク出テ遊ハムト欲フ」(一三)しか見出せず、「父母ニ随ハム事ヲ不欲スシテ……此ヲ惡テ見ムト不欲ス」(二三六)をそれと見なしても三例のみである。そこで、『今昔』における右以外の「欲」の用字法(名詞・漢語の一部に用いられたものは除く)に注目してみると、「園ニ出テ遊ハムト欲シテ」(一三) (ムトシテではなくムトオボシテ或はムトホツシテと見る)や「万ノ人欲カリテ買ハムト申セトモ」(二六五)の如き動詞「おぼす・ほつす」(二例)「ほしがる」(八例)、「御酒ノ欲キニハ非ス」(二〇四)「更ニ物欲キ事无クシテ」(二九一四)「由无キ物欲クシテ」(二九六)の如き形容詞「ほし」(三二例)、「極テ見マ欲シク思ケルニ」(二九九)の如く助動詞「まほし」の表記に用いられたもの(いずれも「マ欲」の形で卷一九以降に一六例)がその総てである。つまり、意欲・願望の意を殊更にムトスやムト欲(おもふ)では表現していないと見得る。また、ムトオモフの形を採るのは「ムト思」も外形的には同じである。この「ムト思」の形は一〇三六例を数えるが、直接に「欲」の訓読語ムトオモフと関係するものではなく、ましてムトスとは交渉を持ち得ない。「ムト思」の「ム」が意志表現である八六一例はまだしも、「くだらうと思う」の意に用いられ「ム」が推量表現となる一七五例は、「欲」字との関係は全く認められない。意志表現の八六一例にしても、「ト」を格助詞とし、「思」も実質的な意味を持って(形式化しない用言として)機能した思惟文となると解釈できるものが殆どであり、「ス」「オモフ」が形式化した「欲」の訓読語ムトス・ムトオモフと同一の意味・用法とは捉え難い。以上の考察で明らかのように、ムトス・ムト為の意味・用法を見ても「欲」の用字法を見ても、『今昔』のムトス・ムト為が「欲」字やその訓読を背景としていることを積極的に窺わせる要素は見あたらないのである。

今一つの漢字「将」については、その意味が『将然』の意である場合、意志の用法以外のムトス・ムト為との関係の有無を明確にし得ない。「将」字については今までとは別の方向から考える必要がある。先にも触れたように、訓読の世界で再読字が成立して以後「将」に「マサニムトス」の訓が定着してからは、和漢混濁文の語法にもそれが何らかの影響をもたらしたのであろうから、ムトス・ムト為と副詞との呼応関係を手がかりにしてみることも有効であろう。まず、

『今昔』における「将」の用字法を見ると、名詞・漢語の一部として用いられたものが最も多いが、それ以外では「キテ」「モテ」の形で複合動詞の上部要素となるものが殆どで、副詞「マサニ」は次の三例しか見出せない。「妻ヲ被取テ将ニ吉ト思フ人有ナムヤ」(一 13)・「観音ノ助ケ給ハムニハ将ニ愚ナラムヤハ」(二六 9)「虚空蔵ノ謀リ給ハムニ将ニ愚ナラムヤ」(二七 33)、「将ニ」はいずれも「ムヤ(ハ)」と呼応した反語表現であり、ムトスと呼応したものは無い。ムトスと呼応したマサニは「當」三例があるのみである。⁽²⁰⁾

○大臣申テ云ク「仏當ニ涅槃シ給ヒナムトス諸ノ葉ヲ不可用ス」ト(三 28)

○夫人：「然リト云ヘトモ今官ニ申ス事ヲ得タリ既ニ此ヲ召サムトス不久スシテ當ニ来ナムトス」(九 30)

○吏ノ云ク「君東ヘ行カム事ニ百歩シテ當ニ古キ垣ノ穿チ破タルヲ見ムトス明ナラム方ヲ見テ可向シ」(九 34)

そこで、ムト為・ムトス(参考にムズ)がいかなる副詞と呼応したか(厳密な意味での呼応では必ずしもない)という観点

副詞との呼応関係 (1~10/11~20/22~31)

ムト為	既ニ(10/15/0)・遂ニ(0/13/0) 必ズ(0/1/1)	忽ニ(8/1/1)・俄ニ(1/0/0)・漸ニ(0/0/1)・今(2/4/3)
ムトス	既ニ(23/9/2)・遂ニ(1/0/0)・終ニ(1/0/0)・忽ニ(9/8/2) 必ズ(12/11/12)・定(3/2/2)・決定(1/0/0) 實(1/0/0)・當ニ(3/0/0)	今(2/5/3)・只今(1/5/3)
ムズ	既ニ(1/0/2) 必ズ(2/0/1)・定(1/0/4)	忽ニ(0/0/1) 今(1/1/0)・只今(0/0/1)

で整理したのが前頁の表である。表に看取できるように、仮名「マサニ」は勿論、「當」以外のマサニ訓を持ち得る漢字（方・將・正・応など）と呼応した例は無く、所謂完了表現にも用いられる副詞を伴う用例の多さが特徴的な点として気付かれる。最も多いのは「既ニ〜ムトス（為）」である。これについては、漢文訓読専用の「マサニ〜ムトス」が避けられ、和文で「マサニ〜ムヤ」、和漢混淆文で「ステニ〜ムトス」が生まれたもので、和漢混淆文における「ステニ」は「マサニ」の代替語であるとの先学の指摘がある。それに従うと、その他の副詞も類似の性質のものと考えてよさそうである。しかし、これは副詞の方の問題であつて、ムトスが「將」との関係では如何かという問題とは必ずしも直結しない。つまり、辞的な語ムトスは、「將」の字面やその有無などの影響下にあつたのではなく、換言すれば、「將」字の訓読と直接の関係を有したのではなく、寧ろ和文の「ム」や古来からある「ムトス」からもたらされた和漢混淆文的表現・用法と考えた方がよいように思われる。

以上見てきたように、和漢混淆文におけるムトス・ムト為が漢文訓読語であつたとしても、訓点資料で漢字（欲・將など）の訓として与えられた「ムトス」と意味・用法の総てが全く同じであつたのではなく、和漢混淆文的用語・用法として和文語ともまた別の性質を帯びたものもあつたと見るべきものの中にあつて、漢字と緊密な関係を有し、漢文の訓読を介して（漢字の字義・用法や訓みの影響を直接に受けて）生じた、或はある意味で和化された意味・用法のものは、「為」字との関係における「ムトス」（就中ムト為）が認められる程度である。つまり、意志表現の「ムトス（為）」は「為」字の訓読語ともいうべき性格のものとして位置づけられるように思う。その意味でムト為の有する一連の特徴は際だつていると言える。

むすびに

ここまで述べてきたことを基に、推論も交えながらムトスに関わる問題を中心に簡単にまとめてむすびとし、卑見

に對する大方の御批正を仰ぐことにしたい。

ムトスは、漢文訓読という「理解行為」の世界で漢文の「欲・將・為」字等と結び付いて訓読に用いられた語であったが、和文においても古くから用いられていた「むとす」とその性質を全く等しくするものであった訳ではない。漢文訓読のために全く新しく用意された語ではないから、漢字の字義・用法と既存の和語との間に共通する部分があると理解・解釈されて、その部分において訓読に採用され、両者が結び付いたものと考えられる。一方、『今昔』の如き（或は広く和漢混淆文でも）広い意味での「表現行為」（漢文の出典があつたとしても）と位置づけられる資料などに用いられたムトスも亦、「欲・將」等の訓読語たるムトスと全く同じであつたのではないと考えられる。つまり、和漢混淆文におけるムトスの場合、漢文の当該漢字の字義・漢文訓読のムトス・和文の「むとす」という三者からの影響を受けながら存し、しかもいずれとも異なる「和漢混淆文用語」とも言える変質したムトスの意味・用法もあつたと考えられるように思われる。中でもその典型的な様相を呈しているのが、本稿で主に触れたムト為である。漢文訓読文と和文との交渉・相互の受容のあり様を、この期の特徴として、漢字仮名交り文の中のムト為が反映していると見得るように思われる。

『今昔』におけるムト為の大きな特徴として、表記上も意味・用法上も、ムガ為と通ずる点のあることを指摘した。これは「為」本来の字義と和語との結び付き、訓読の上でタメでも動詞スでもあつたことなどが、ムト為に斯かる特徴的な意味・用法を担わせた誘因と考えられる。ムト為とムトスとの表記の相違が意味・用法の相違を反映していると見得ることの一つの背景であろう。更に、本稿で主に論じてきたのは意志の用法に関わるものであつたが、その限りにおいて、ムトスが漢文訓読語的性格の語と把握されるのは意志の用法に用いられるものである。その場合、背景にある漢字や訓読として直接に与るのは、「欲・將」やその訓読語ムトスではなく、「為」字やその訓読との関係が最も緊密なものとして指摘・想定できる程度である。これらが、ムト為で表記されることの有意的区別意識・必然的事情と関係すると考える。つまり、ムトスが漢文訓読用語であつたとすればそれは「為」によつてもたらされたものであり、或は「為」

字を介して和漢混淆文のムトスの意味・用法の変質があつたのではないかと考えられるのである。

『今昔物語集』におけるムト為表記の語を手がかりに、ムトスの性質(主に漢文訓読語との関係)について考えてきたが、課題として今後に残された問題も多い。例えば、漢文・和化漢文それぞれにおける「為」字の字義と用法、訓点資料におけるムトスの位置、文体的位相差から見たムトスの共時的・通時的考察等々考えるべき点が多い。ムズの発生については論じられてきたが、これらの事を検討する事によって明らかになる、より細かなムトスの性質やムトスとムズとの関係、ムトスの変質やムズへ至る経緯など考察されるべき余地は未だ残されているように思う。

注

- (1) 吉田金彦「今昔物語集における推量語「むず」「むとす」の用法」(『訓点語と訓点資料』19 昭和三六年十一月)・同「中古・近古における推量語「むず」・「むとす」の用法」(『国語と国文学』39・3 昭和三七年三月)・同「むず」(んず)の成立」(『国語国文』31・8 昭和三七年八月)、小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要』3 昭和四六年三月)・同「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」(『鎌倉時代語研究』11 昭和六三年五月)
- (2) 関一雄「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」」(一)・(二) (山口大学『文学会志』41 平成二年一二月)・『山口国文』14 平成三年五月、菅原範夫「延慶本平家物語の「ムズ」小考」(『鎌倉時代語研究』14 平成三年一〇月)
- (3) 大坪併治「訓点語の研究」(昭和三六年 風間書房)・同「平安時代における訓点語の文法」(昭和五六年 風間書房)
- (4) 拙稿「和化漢文における「将・欲」と「可・当」等について——〈意志〉の意味・用法を中心に——」(『退官記念国語学論集』平成四年 汲古書院)
- (5) 『観智院本類聚名義抄』における「為」字の訓は、「佛下末二九・僧上七九」に掲載される。
- (6) 注(5)に登載の訓参照。『今昔』における「為」字は固有名詞や一般名詞に用いられ「キ・タメ」と訓せられるべきものか、動詞として「ナス・ナル」「ス」と訓せられるべきもの、或は「タメ」と訓せられるべきものいずれかである。頻度から言えば「ス」「タメ」の意味で用いられるものが圧倒的である。
- (7) 「ムト為ニ」は「ムトシニウス」の語法の可能性もある。助詞「に」が活用語の連用形をうけ「ゝするために」の意を表す用法を持つことは、辞書類にも解説される(『日本国語大辞典』『新潮国語辞典』等々)。「白波の寄せ来る玉藻世の間も続きて見仁来む清き浜傍を」(『万葉集三九九四』)「馬などむかへにおこせたらんに」(『徒然草一八八』)

『今昔物語集』における「ムトス」「ムト為」「ムガ為」

(8) 『今昔』にも「為」が返読字であったことを反映する次の如き例がある。

○切ル者共ノ云ク「由無キ相為ル御房カナ此ク許ノ悪人ハ何ソノ往生可為キノ物不思エヌ相カナ」ト云テ只切ニ為切ムト相人其ノ切ラムト為ル足ノ上ニ居テ(二五 22)

(9) 「甲動詞+ムト為テ・ムトシテ」乙動詞」の型をとって「しよとうとする目的でしよする」の意に解釈できるものもある。例えば「此ノ火ヲ以テ仏ノ御身ヲ焼キ奉ラムトシテ火ヲ香樓ニ投ルニ其ノ火自然ラ滅シヌ(三 34)」「飛鳥ノ郷ニ堂ヲ起テ此ノ釈迦仏ヲ安置給ハムトシテ先ツ堂ヲ被造ル間(一一 22)」の如くムト為表記に限らずムトス表記のものにも類似した意味・用法と認められるものもあるが、ここでは斯かるものは対象としていない。漢字「為」(主にその訓読)との関係で、タメニとの類似性を見ることによって、ムト為の性質が顕現すると考えるので、ムト為ニ或はムトスルニで現れるもののみを対象とした。これによつてもムトス表記は漢字「為」を背景としておらず、一方ムト為は「為」が「タメ」とも「ス」とも結び付いて理解されていたことを背景としたものであり、そのことが表記の相違に反映したと諒解される。

(10) 勿論ムトス表記にも「スル(ハ)ムトス(ル也)」の型で行為の目的や理由を表すものは一例も確認できない。

(11) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(築島裕)によると「タメニで連用修飾格となるもの」は平安和文・訓読語の両方に認められるが「タメナリとなつて述格となるもの」は平安訓読語の特有語法であるとされる(三七二頁)。

(12) これらの問題には他に和文における助詞(就中「に」)などの意味・用法の複雑さも絡んでいて「井二行テ水ヲ汲ママニ」足ヲ洗ハムニ(或はトテ)其ノ井ニ行ヌ」とも和文では表現可能であることなどの関係も考えるべきかも知れない。煩雑になり過ぎ焦点を拡散させてしまうので、今回は考察をそこまでに及ぼさない。

(13) 具体例と所在は次のとおり、「ムト為ル也」(五 3)「ムト為ラム」(一〇 35)「ムト為」(二二 18)「ムト為ル也ケリ」(二七 35)「二九 35」「ムト為ルナメリ」(二七 40)「ムト為ツル也」(二九 35)。

(14) 本稿で対象とした用例は「ム」が仮名表記されているものに限つた。文脈上「む」が当然予想される(補読される)といつた類のものも用例としては数えず、またマ行動詞に添えられた「ム」が活用語尾とも未然形承接の助動詞「む」とも両様に解釈できる場合も対象からはずした。

(15) ムガ為の「ム」を総て意志の用法と見ることには、異論もあろうし、聊か無理もあるかも知れない。殊に動作主体が第三者である場合は、その意志に基づく動作の描写ではなく、単なる動作の描写(この時の「む」は所謂婉曲の意)ともとれる。しかし、用言を承けて「目的」を示す場合、「用言連体形+為」でも表現可能(現に三例存する)であり、或は「用言連体形+助詞ニ」でも表現可能(注(7)参照)であつたことは、次の如き例が存することからも知られる。

○仏羅睺羅ヲ迎ヘテ出家セシメムト思シテ目連ヲ以テ使トシテ迎ヘニ遣サムト為ル程ニ(一 17)

にも拘らずムガ為の表現が選択されたのであるから、「ム」はあってもなくても良い(三者間に何の差異もない)のではなく、また助動詞「ム」の有無が意味の相違に影響しない(婉曲)筈もないと考える。つまり、他の二者との差異(「ム」の有無)は、動作主体が第三者である場合も、ムガ為表現が第三者の動作に目的としての「意志」があることを示そうとした心理的描写となる点にあると考えたい。助動詞「ム」が意志に基づく動作として描くために機能しており、その点において、「ム」は意志の用法と認めて良いように思う。

(16) 注(6)参照。用言承接の場合「タメ」か「ス」が主。

(17) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の國語史的研究』(昭和四二年 東京大学出版会)、大坪併治『平安時代における訓點語の文法』(昭和五六年 風間書房)

(18) 意欲・願望の意を表す際は、和文と同じく、助動詞や終助詞を用いて表現することも行われ、その語は仮名書きされる。例えば、助動詞マホシ(四例)、終助詞バヤ(巻一〜一〇に一一例、巻一〜二〇に一六例、巻二〜三二に二五例)・ガナ(巻二八以降に四例)・ナム(巻三〇に二例)などである。

(19) 「ムト思」における助動詞「ム」の意味・用法に着目して見た内訳は次のとおりである。巻一〜一〇(意志三〇一例・その他二一例、巻一一〜二〇(意志三三三四例・その他五七例)、巻二二〜三二(意志三三六例・その他九七例)。漢文訓読色の強い巻において「ムト思」が意志表現に使われる割合が高いが、これを以って「ムト思」と「欲」との関係が前半部(漢文訓読調の文体)で強いとは言い難い。

(20) 副詞「當」の呼応をみると他に次のものがある。ベシ・可(16/2/0)、ム(3/8/5)、ジ(2/0/0)、呼応語無し(8/2/1)。巻一六以降の「當〜ム」は反語表現になる点に特徴がある。また、副詞「マサニ」は「正ニ」もあり、巻二・六に各一例「正ニ〜可」の形で出てくる。この場合は、命令表現となっている。

(21) 原栄一「陳述副詞「まさに」の代替語「すでに」について」『金沢女子大学紀要』3 平成元年(二月)